

## 新生と創造があるためには

雪降りしきる中、新年を迎える。昨夜来、寒風すさび、今朝は全てが清浄なる純白に被われ、真に美しい。凍てつく道を箕籠もる老い人がおぼつかない足取りで、雪に埋もれた社寺を訪れ、元朝参りを済ませ、またぼつぼつと帰る。

正月三が日はこの寺も久しぶりの帰省家族でにぎわった。彼らは誰しもが、実にいろいろな困難や苦しみにあってはきたが、しかし、おかげさまでなんとか一年無事に過ごし、いまここで新しい年を迎えられたことに深い喜びと感謝を感じていた。そして、今年こそは良い年でありますようにと新たな気持ちで先祖や氏神様に祈願をして、また再び、都会の雑踏の中に戻っていった。あとにはぴゅうぴゅうと吹く風のみが残っていた。

さて、新生と創造があるためには昨日の自分が死なねばならない。しかし、人は常に過去にこだわり、自分にこだわる。そのこだわりに生きる限り決して自分からの自由はなく、自分に縛られる限り、新たなものを生むことはできない。自分というものをよく見てみたまえ。それらは全て過去のこだわりでしかない。その自分に固守する限り自己変革は起こせない。そればかりか、自他の葛藤や争いを常に巻き起こし、やがて内的にも外的にも自分に引きこもるか、爆発するかであり、まるで自殺的・他殺的悲惨な結果を招くことになる。これがたいていのわれわれである。なぜ、人はこんなに自分にこだわり、互いに傷つけあわざるをえないのだろうか。いや、本当は誰も傷つけたくないのだ。だが、どうすることもできない自分の怒りがあって、いかに正当化しようとも、単純な自分のこの問題が、はずせないのだ。それが残る限り、互いに何を言い、何をしてかすかわからない。それが恐ろしい…と、誰しもが心の奥で自分を恐れているのである。自分を押さえきれず爆発することを恐れ、仮面をかぶり、自己を偽り、自分を殺して関係を維持し、生きようとする。自分でどうしようもなくなると信念や信条、宗教や哲学、モラルやモットー、あるいは全く自分を忘れさせてくれる趣味や価値観の中に逃避するが、決して自分の怒りはなくなりほしくない。そこでますます、自分の経験や自分の生き方を強化し、こだわりにしがみつくと悪循環に陥る。このことが、どれだけ自分や他人を傷つけ、紛糾を起し、戦争や殺し合いにまで発展してしまっているか、人間同士の関係、世界中の混乱と紛糾を見れば一目瞭然のことである。

だが、紛糾を避け調和を目指すべく、自己を殺して生きようとするのは、他を殺すことと同根である。なぜなら、他を赦し、仮面をかぶり、嘘をつき、殺そうとする自分があるかぎり、自己欺瞞に陥っているからである。自己欺瞞に陥っている限りいかに巧妙に自分のこだわりを捨て、正義やあるべき姿や信念、神と一体化していてもそれは錯覚でしかなく、ここからは何の新生も創造も生まれては来ない。

新生と創造があるためには昨日の自分が死なねばならない。しかし、自分が死なねばならないということは、自分を殺すことではない。昨日の自分にこだわる自分に気づくことが、自分を解放することになるのだ。こだわりをとろうとし、こだわりをなくそうとするのは誰か。自分を殺そうとし他者を黙殺しようとするのは誰か、その自分に気づくことが自己を自由にし、解放させる。自分に気づくためにはまさに深く自己を理解すべく、自己凝視をすることをおいて他に道はない。自己理解があつて初めて自己のこだわりから解放される。自己のこだわりが解放されて初めて過去は死んだものとなる。これまでの自分がなければそこには全く新しい自分があり、まさにそれが新生であり創造であるのだ。

年頭に際し、新たなる年をどう迎えているか、自己に対し真剣なる問いを発したい。

朝日山 萬歳楽院 法圓寺 雲伝龍雲